



「森井先生のこと（その4）」

真崎隆治

大木英夫著『ピューリタニズムの倫理思想』（1969年）の書評を出版社に依頼されて森井先生が執筆されたものにたいして、大木氏がはげしく反論を加えてきた。それへの反駁文は、タイトルを『森井氏の書評に答える』という大木英夫氏の文章に答えて」という自費出版パンフレットで、400字詰め原稿用紙50数枚におよぶ力作となって1971年11月に出された。ということはおそらく35年前のことである。所々にユーモアを配しながら小気味よく切り込んでいく明快な文章は、痛快であるとともに学問を志す者への示唆に富む味わい深いもので、森井先生の精神の躍動がそのままに伝わってくる名文であり、先生の書かれたもののなかでも傑作の一つといえよう。

文は大木氏の反論にあわせて17項目からなり、それに短いまえがきと、『イギリス史研究』第4号所載の同書をめぐる研究会記録を「追記」とする。読み出したならそれこそ「書を置く能わず」という本文のいちいちを紹介する余裕はないし、またその必要もないのであるが、森井先生の論の展開の一例として、「ルターの後継者ブツァー」の項目を手短かに述べておく。

大木氏は森井先生がブツァーをルターの後継

者としたことに触れ、「この人は教会史の常識もないのか」といい、「雑な歴史家」と断じる。これにたいして先生は、自分にはそのような主張をする独創性がないことを嘆かれたあとで、「僕の知る限りでは」ジャック・クルヴォワジエ、アンリ・ストロース、フランソワ・ヴァンデル等がブツァーをルターの後継者としていることを挙げ、だからといって、こうした権威のゆえに自分はそういつているのではなく、むしろ「そういう権威主義くさいことは大嫌い」であり、ただ、ルターの後継者ブツァーといったからとて「人から愛想をつかさされるほど非常識なことではないのじゃないか」と述べられる。次いで、メランヒトンなどはルター神学のうち義認の問題をもっぱらに受け継いだが、ルターにとって聖化の問題も重要であり、「ルターの弟子の中で師の義認と聖化の思想を最も忠実に継承しているのはブツァーではないか」と指摘される。さらに、ブツァーがルターの後継者であるかないかは、「ルター理解、宗教改革の解釈、人文主義の評価」によることであり、「森井がブツァーを『ルターの後継者』に仕立て上げた」というような事柄ではないと語り、さらに、ここでの重要な問題は後継者問題などではなく、大木氏の手放しのピューリタン讃歌にたいする疑義がここでの中心テーマであるのに、「その肝心の疑問にはまともに答えないで」一言半句をあげつらう態度を「どういうわけなのだろうか」と訝るのである。

以上、不十分な要約であるが、それでも森井先生の弁論が、二枚腰どころか、三枚も、四枚も、これでもかというほどの奥行きをもって展開されていく凄みは感じていただけると思う。先生の言葉の背後には、たとえそれが一言半句のようなものであっても、十分な学的裏付けがある。それは近著の『ジャン・カルヴァン』において、さらに痛感させられることになる。

このパンフレットの内容は豊かすぎてとても一言で片づけられるものでないが、小文のためにあえてまとめるとすれば、「ピューリタニズムのみ

が正しく、他は不可とする大木流権威主義への抗議」である。権威主義は内実のない空疎なものであるほどいつそう恐ろしいものになる。なぜなら、中身がないだけ権威を守ろうと猛々しくなるからである。森井先生の文をお借りするまでもなく、商品の広告には良い面しか書かれていない。しかし学問としてなにかを語るとき、その良い面のみを喧伝し、悪い面を指摘されると憤然として異論を抹殺しようとするような態度は、学問にふさしいものとは到底いえない。ところで、この小冊子の真の問題は、大木個人を超えて、思想にせよ政治にせよ宗教にせよ、人間がともすればこうした空疎な権威主義を振りかざしたくなる危険を警告されているのではなかろうか。それは危険であると同時にまた誘惑的なことでもあるのだ。私は前号でこれを仮に「教皇主義」と呼んだ。それはいつでもどこでも変幻自在に現れる始末に負えないものなのである。だからこそ、人はいつも知性を研ぎ澄ませて警戒していなくてはならない。知性だけではない。森井先生のエピソードをこれまで書き連ねてきて、実は先生からも呆れられていたのであるが、そうしたものから垣間見られる資質の数々、つまり、理性、感性、懐疑心、無邪気さ、ユーモア、努力、忍耐、そしてなによりも、真剣に生きようとしている人間への愛、こうしたものが一体となって、先生の言葉を、思想を、行動を、つくりあげているのである。(次号完結)

(まざき たかはる

所員・教養教育センター教授)

